

---

領域名：精神保健看護

報告者：仲本 勉

---

教育及び実践の課題

---

近年、OSCEなどのシミュレーションを取り入れた看護教育が活発に行われている。精神看護においては、看護技術が状況依存的であり評価が困難なことにより、模擬患者(以下、「SP」)を導入し、SPシナリオを利用することで、現実に近いレベルで患者を再現し、学生の精神保健看護学習の目標達成を促すことができることが実績で示されている。

本学3年次の精神保健看護演習では、ペーパーペイシエントを用い、学生同士のロールプレイを通して精神疾患患者の精神症状の理解と対応を学習している。また、4年次の精神保健看護領域のOSCEでは、精神科看護経験のある教員が事例を作成し、患者役を担っている。OSCEの際、課題が終了すると教員は受験者に対し評価者の視点でフィードバックを行ない、SPの立場からの学生へのフィードバックを行われていなかった。

---

活用した論文の概要

---

本文献は、教育の構成主義およびKolb(1984)の経験学習論の見地から、学習戦略としてのSPの開発と利用について記述している。訓練を受けたSPを活用した精神看護シミュレーションの後に、学生と教員、SPでグループディブリーフィングを行う。この過程で学生はうまくできた点や、別の方法を用いてできたであろう点について、振り返ることができる。SPはディブリーフィングで全般的な満足度を学生に伝え、学生の対応で感じたこと、その原因となった学生の行動を伝えることで、学生は患者の認識や感情について聞くことができる。最後に学生はSPとのディブリーフィングプロセスを評価する質問票を記入、学生が帰った後、教員とSPが学生とのディブリーフィングの評価を行う。SPを用いた精神看護シミュレーションは学生の面接および治療的コミュニケーション技術学習、自信の増加や不安の減少に寄与していた。

---

教育及び実践への活用

---

精神保健看護領域のOSCEに本文献のSPによるディブリーフィングを取り入れ活用した。患者役を担った教員は、患者として学生に聞いて欲しい事や感情をフィードバックした。その結果、学生は自身の課題や強みに気づき、修得した知識や技術を実習での活用や臨床現場での応用に言及していた。

今後、3年次の演習で学生同士がSPを行い、学生に患者の気持ちをイメージして答えてもらうことや、SP役の教員から、患者の立場をフィードバックしていくことで、対象理解やコミュニケーション技術向上につながると考えられるため、シミュレーション教育内容をさらに精練する必要がある。

---

参考文献

---

Jessica Doolen et al. (2014) : An Evaluation of Mental Health Simulation with Standardized Patients. International Journal of Nursing Education Scholarship, 11(1), 1-8.

---